

である。協力一致して活動して貰はなければならぬ。而るに吾が國では此三尊いづれも眠つて御座る有様である。どうか此の三尊の一つたる諸君

が此の方面に其活動せらるゝことを希望に堪へないのであります。(講演の概要、文責在編者)

幼 兒 と 迷 信

文學士 寺 田 精 一

幼児の周邊にある人々の態度や言語の忽にすべからざること、今更喋々の必要はない。茲に述べんとする迷信の如きものも、普通の家庭生活に於ては、左程に注意されぬ場合が多いけれども、迷信が色々な關係よりして、幼児の若々しい精神に影響して、永く後來に思はしからぬ結果をまねくことのあるは、一考しなければならぬことである。

幼児の迷信は、其殆んど全部は他より教へられるものであつて、自ら或事實に遭遇して、一つの誤られたる信仰を得るに至るといふことは、殆ん

どないと観てよい、何となれば彼等に於ては、一つの事實を経験すれば、それを其儘一つの経験として取入れて、未だそれに對して思考を回し、其結果一つの信念を得るといふまでには、發達して居ないからである。而して幼児に迷信が教へられる場合には、二つの異つた場合がある、即ち一は教へる人が全く信すべき事實として、迷信を教へる時、二は教へる人は全く迷信たることを知れども、それを聞き入れた幼児は、これを一つの信すべき事實となす時である。

教へる人が迷信とは知らないで、幼児にそれを

教へるのにも、色々な場合がある。自分は迷信ではない、眞に信すべき事實であると思ふて、かくかくの場合には如何にしなければならぬとか、この事實はかくかくのことより、必然に起ることであるとか、不思議のやうに見えるけれども、確にあることであるとかいふて、固く自ら信するが故に、これを他の人々にも強ゆるのである、従つて親切心から家庭の幼児にもこれをいひ聞かせて、之れ等の事實を眞のこととして信せしめるのである。

固より迷信といふことは、智識の多寡、年齢の如何で定まるものではない、相當に新しい學問をした人であつて、世上の事柄に對しては、正確に判斷をなし得る人でも、往々にして思ひも寄らぬ迷信に捕はれて居る人がある。又中には年齢も若く、教育も左程受けないのに、所謂迷信のことには一向注意しない人もある。けれどもこれを大體よりいふ時には、常識の狭い、教育程度の高か

らぬ人に於て、迷信の多く行はれるのは、争はれざることである。又同じやうな境遇の人であつても、其人の個性に依つて、迷信に陥り易い人と、然らざる人とがある、かの感情性の人の如きは迷信に至り易いのであるが、尙或偶然なことから、迷信に入ることが甚だ多い。

何れにせよ迷信なる事實は、社會上非常なる勢力を有して居つて、これを信する人々に向つては、批評疑惑の餘地は更にないのである、従つて是等の人々が幼児に對する時には、幼児が全くこれを信じなければ安んせぬのである、かくて家庭の中に一人の迷信家があると、其家の子供は知らず識らず、其迷信を信じて、彼等の精神の一部分をなし、日常の行爲もこれに依つて支配される、ことが、少なからぬやうになるのである。尤もその迷信家が、幼児に向つてそれを信せしむるやうに努めな場合であつても、其人の迷信は或は言語に於て表はれ、或は舉動に表はれて、幼児の模倣の對象

となり、未だ其人の言語を理解し、其舉動を判断する程の發達をなし居らざる幼兒は、只かゝる時にはかくすべきもの、かゝることは眞實のこととして、自然の間にそれ等の迷信が、幼兒の精神中に形成さるゝことも少くないのである。

次に幼兒に接して居る人は、迷信であるといふことを知つて居るに拘らず、これを幼兒に教ふるといふ場合であつて、それには此の種々なるものがある特別な動機はなくて、迷信たる事實を教ふる時、自からは迷信であると知つて居るから、一笑に附することであるけれども、何等かの序に話し、又は教ふるといふが如き場合である。

迷信たる事實に面白味があるので、幼兒を喜ばす爲めに、語り聞かすといふ場合である、全然あり得べからざることや、不思議な事實を誠しやかに語り聞かす時には、幼兒に假令これは本當のことではないと、豫め斷つて置いて、暫く聞いて居る間には、本當のことと思つて、一心に其先を

尋ねるやうになるのである、殊に空想的な事實に興味を持つ時期の子供であると、一層此種の話を喜ぶものである。

幼兒があまりもしないことを聞いて、恐ろしく思ふのを以つて、或は面白いこととし、或は一時の方便から威嚇するといふやうなことが、多くの家庭などによく見られる事實である。而して又幼兒の方に於ても、一種の好奇心から、恐ろしくはあつても、これを聞かして貰ひたいのである、かくて家庭のまといには、時々妖怪談などが持て囃されるのである。又叱責する爲めに狐や狸を以てすることも甚だ多く見られる事實である。

迷信が幼兒の精神上に及ぼす影響を考ふるに、迷信の内容性質に依つて、色々異なるものと観なければならぬ。即ち迷信たる事實が、特別に深い印象を興へるやうなものでなく、却つて日常生活の上に、よい影響を興へるやうなものであれば、其迷信は少くも悪いものとはいへない。け

れども迷信たる事實が、非常に幼児の精神を刺戟するやうなものであつて、永く強い印象を残すやうなものである時には、大に注意をしなければならぬ。元來幼児の時期は盛に精神、身體の發達する時であるから、出来るだけ無理な内外の束縛を離れて、發達せしめなければならぬ。然るに迷信などを以て彼等の日常生活を束縛せしむることとは、決して好ましいことではないのである。

迷信の中にて、吾人の日常生活を色々に束縛するものが少くない、かくかくの日にはかくかくのことはしてならぬとか、どの方角に向つては氣を附けねばならぬとか、朝何等かの出來事があつたならば、其日には何も企てゝはならぬとかいふやうに、様々な事實に超自然的の因果關係をつけて、日常行爲の軌範として行く類の人がある、それも自分一人にてそれを實行すればよいのであるけれども、かゝる種類の人に限つて、決して自分一人にて満足しない、必ずや自分の一家の人々に

實行せしめなければ、心の安んじない人々である、勿論何事をも解しない幼児などにも、これを當嵌めなければ承知しないのである。其迷信を神聖な事實として信じて居る人には、それでなければ甘んずることが出来ないのであるが、全く此の方面の事實を一笑に附し、何等の權威をも認めぬ人にとつては、此上もなく迷惑な窮屈なことである、況んや何事も知らない幼児に於ては、何故に自分が思ふまゝに出来ないのか、自分の行動の束縛される理由を解せずして、然かも遂には此迷惑な窮屈な掟を守らなければ居られないやうな、一種の強迫觀念を形成して、成長してからまでも、其人の行爲を支配するやうになることが、決して稀有のことではない。

而して迷信は右の如く、吾人の行爲を束縛するやうな性質を持つて居るものが多くあるが、それと共に一種の恐怖心を伴ふが如き、種類のものも甚だ多いのである。幼児は狐が恐ろしいとか、狸

が恐ろしいとか、幽霊が恐ろしいとかいふことを、生れながらに知つて居るものではない、けれども泣く時や、いふことを聴かぬ時に、狐や狸が來るといはれ、幽霊が出るといはれて、泣きをやめ、大人しくなる所以のものは、幼兒の近くに居るものが是等のものゝ恐ろしいことをいひ聞かせ、如何にも恐ろしいやうな態度をして見せるものから未だそれ等を一度も見たことのないのに、只此上もなく恐ろしきものと、思惟してしまふのである。而してかの叱責の方便として、かゝる種類のものを用ひ、威嚇し恐怖せしめて其目的を達しやうとするのは甚だ其策を得たるものではない、かくの如く威嚇や恐怖に、迷信的のものを持ち出して幼兒に對するのは、最も注意をしなければならぬことである。

殊に如何に幼兒が興味を有するからとて、恐怖を伴ふが如き迷信的事實を以てするのは、宜しからぬことである、よく幼兒が話の終つた後に、一

人にては睡につけないとか、廁へ行けないとか、夢に驚かされるゝとかいふことが見られるのであるよしかくの如き具體的結果の見られない場合でも、決して彼等に好ましき影響を與へて居るとはいはれない、必ずや其精神中に、よからぬ印象を受けて居るのは、明かなことである。次に幼兒の恐ろしく思ふのを面白いこととして、恐怖を感ぜしむるが如き、迷信的事實を話す如きことは、心ある人のすべきことではない。元來恐怖は其表はれ方に於て見るも、極めて消極的のものであつて、發展的な、元氣を添えるやうなものではない。幼兒等がかゝる恐怖的事實を聞かんと欲するには、種々なる原因もあらうけれども、多くは好奇心に因るものである、決して心から落付いて、楽しんで聞くといふものではない、さればかゝる方面へは、なるべく話頭を轉じないやうに努めなければならぬ。それを只子供等が聞きたがるといふのを以て、大人が聞いてさへも、恐怖を催すが如き事

實を、自己の一時の興に任せて、幼児に語るといふが如きは、謹しむべきことである。

而して最後に一言すべきことは、幼少の時に受けた深い印象が、後に其人の一生を通じて、其人の行爲を多少に拘らず支配することのあるは明かなことであるが、この迷信の如きもの、場合に於ても、成長して後に意識的に其影響して居るのを見ることがあるが、又無意識的に影響して、自分では何故に思ふ通りに行動が出来ないかと疑ふこともあるのである。されば幼児の時に聞いた色々な迷信的な事實は、常識が豊富になり、知識が多くなるにつれて、其全く迷信たることが知られ、其不可思議であると思つたことや、恐ろしいと思つたことなどは、何れも根據のない虚空なことであると思つて一笑に附するも、然かも其心の奥には、尙全く取去ることの出来ない、或もの、存することが少なくない、即ち理論上では何の事でもないのに、實際の上に於て、日常の行爲の上

於ては、矢張り幼児の時に受けた、迷信的事實の印象が關係して居つて、どうしてもこれを取去ることが出来ないといふことは、決して珍らしいことではないのである。

かくの如くにして或種の迷信は、若々しい幼児の腦裡に、深い強い印象を永く留めて、つまりぬ迷信であると知りつゝも、然かもそれに自己の行爲が支配されて、一生の間其人の性格に關係を斷たないで、存在するのである。前にもいふた如く、此關係は自覺的に知つて居ることもあるけれども、全く自らは其關係を知らずに次第に此印象が其人の精神に影響して、漸次に性格を變化せしめ、又は自らは迷信と知つて居つても、内部の印象は尙ほそれを肯んせないで、依然として其人の精神作用に關係を有して居るといふこともあるのである。されば幼児と迷信、殊に恐怖を伴へるが如き迷信は、最も注意を要すべきものと云はねばならない。